

北部九州の弥生時代人 ——頭蓋形質の地域性について——

米元 史織

九州大学総合研究博物館：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：本研究では、縄文時代の人々とは大きく異なる高顔性を有するとされ、しかし、1989年以降その地域性に関して体系的な検討がなされていない北部九州弥生時代人骨の頭蓋形質の地域性に関する検討を行った。その結果、縄文時代の津雲・吉胡や西北九州の弥生時代人骨と比べると、北部九州地域、さらには山口地域を含めても、高顔という点において類似性が高い集団が存在したことが追認された。さらに、その内部において若干の差は認められ、早良平野や春日・福岡平野・三国丘陵などでより強い高顔性を示し、周辺部にあたる遠賀川流域・朝倉・佐賀東部、さらには山口と相対的に顔高が低くなっていく傾向が確認された。この点も Doi and Tanaka (1987)、中橋・永井 (1989a) などの指摘を追認するものである。一方で、これまで指摘されてきた三国丘陵地域の著しい高顔性と、新町遺跡9号人骨の顔面形質が縄文あるいは西北九州的という見解については再評価が必要であること、個体レベルでの分析を行うと高顔な個体と低顔な個体はいずれの地域のどの時期においても存在することが明らかとなった。これらの結果から、いわゆる渡来的形質は北部九州地域で確立し、その内的多様性は混血が進む中で生じる多様な形質発現を一因とするものといえるであろう。

キーワード：弥生時代人骨、北部九州地域、頭蓋形質、地域性

はじめに

これまでに形質人類学の分野でなされてきた現代日本人の起源・形成過程に関する議論は、「置換説」、「変形説」、「混血説」という3つの説に大きく分類することができる。縄文時代に日本列島に住んでいた人々と、縄文時代以降の人々とは顔かたち等の形質的特徴が大きく異なることから、両者の関係をどう考えるか、という点が各説の相違点であった。

1949(昭和24)年に、京都大学の清野謙次(1885-1955)の「混血説」と東京大学の長谷部言人(1882-1969)の「変形説」という2大学説が提唱される。その当時は未知であった弥生時代の人骨の発見がこれらの論争の決着のための鍵であった。

1953年に山口県土井ヶ浜遺跡(金関・永井・佐野1960)と佐賀県三津永田遺跡(牛島1954)の発掘によって弥生時代の人骨が発見される。周知のように、金関丈

夫はこれらの資料をもとに、「渡來說」を提唱した(金関1959)。金関丈夫の「渡來說」と鈴木尚の「小進化説」を通して行われてきた日本人起源論争において、北部九州・山口地域の弥生時代人骨の示す、縄文時代人骨と比べると特異な形質の特徴と由来を明らかにすることは重要な課題であった(金関1976、中橋・永井1989、中橋1993)。その後も北部九州・山口地域から続々と発掘された弥生時代人骨については、その頭蓋骨の形質的特徴をはじめとして、地理的分布(中橋1989a、中橋・永井1989a、松下・内藤1989)や系統関係(金関1976、Brace・Nagai 1982、中橋・永井1989a、Nakahashi 1993、中橋1995、2005)、人口動態(中橋・永井1989b、中橋1993、中橋・飯塚1998・2008、田中・小澤2001)やプロポーシオン(Temple 2014、高椋2016)など様々な研究が積み重ねられている。

北部九州地域に限っていえば、数多くの遺跡から弥生時代人骨が出土しており、その形質的特徴に関しては個々

に極めて詳細な報告がなされている（松下他1984, 松下他1982, 松下1981・1985, 分部1985, 中橋1989b・1990a・b・c・1991a・b・1992・1993a・b・c・d・1994・1995a・b・1997・2001a・b・2004, 中橋・古賀1994, 中橋・永井1987a・b, 舟橋・金・田中2000, 田中他2001, 舟橋・岡崎2001, 岡崎・重松2003, 中橋・岡崎2006, 米元・高椋他2010, 松尾他2020, 星野他2021など）。中橋・永井（1989a）によると、弥生時代人骨は高顔・高身長であることが他の時代と大きく異なる点である。さらに脳頭蓋に関しては、頭高を除いて大きく、中頭型であり、顔のサイズも全体的に大きく、高・広顔、鼻根部が扁平、プロスティオンの下方への伸長が著しいと指摘された（中橋・永井1989a）。

また、金隈遺跡や隈・西小田遺跡など規模の大きい墓地遺跡の発掘・報告によってその地域性も明らかにされており、永岡遺跡（中橋1990a）や隈・西小田遺跡出土人骨（中橋1993d）に関しては、頭蓋全体のサイズが大きく、高顔性がより顕著であり、眼窩や鼻型にも同傾向が認められること、鼻骨の扁平性が顕著であることが明らかにされている。ほかにも、松下（1985）は、横隈狐塚の人骨を調べ、狭・高顔・高身長であると述べた。また、佐賀平野の託田西分貝塚では高顔・低顔両形質の混在も報告され（松下・分部ほか1984）、福岡平野と佐賀平野の弥生時代人骨にも若干の差がみられ、佐賀平野のほうが顔面の幅径がやや広いともいわれている（松下・内藤1989）。

中橋・永井（1989a）は、福岡平野から佐賀平野にかけての帯には高顔の弥生人がかなり密に分布しているが、藤崎遺跡のような沿岸部では傾向の異なる形質を有する個体もみられ（中橋1990c）、一方で福岡平野から少し奥に入った太宰府や二日市あるいは筑紫野市あたりで出土した人骨に著しい高顔性がうかがわれ、周辺部にあたる遠賀川流域や筑後川中・上流域の弥生人は相対的に顔高がやや低く鼻根部の扁平性が低い個体もみられること、さらに、山口地域よりも北部九州地域のほうが、高顔性が強いことなどを指摘している。中心部と周辺部、あるいは沿岸部と内陸部といった地域間にやや形質上の差異がみられることを指摘し、いわゆる渡来系形質の地域差は土着の人々との接触の密度と相関するのではないかと（中橋1989a）、と述べている。さらに、糸島市新町遺跡では弥生時代初頭から前期初頭の支石墓から低顔・低身という明らかに縄文的・西北九州の形質に近い個体が

出土しており、個体数が少ないながらも、いわゆる「渡来的形質」の形成過程、ひいては稲作の受容過程に関する議論も行われた（中橋1987b）。

弥生時代の形質の特徴が大枠で把握された後に注目されたのは、いわゆる「渡来人」の規模と人口増加率に関する議論であった。これは縄文の狩猟採集から弥生の水稲農耕への文化的な移行がいかになされたのかという議論でもあったため、考古学分野の研究も多い。金関丈夫自身は、縄文時代から弥生時代への形質的な変化が劇的であったことから「新しい種族の相当な数が」（1955）と述べ、1972年には「初期の移住者は（中略）そのほとんどが男性で、彼らは行く先の女性を容れて新しい社会をつくる」と、縄文時代から弥生時代の土器づくりの連続性の要因を説明しており、当初は混血を前提としつつも相当の渡来を想定していたとも考えられる（金関1955, 1972, 1976等）。さらに、内藤（1971）が弥生時代人を「西北九州型」と「北九州型」に分け、これをうけて埴原（1991・1995）が「北部九州という狭い地域に2つのタイプの弥生人が住んで」おり、「この状況は縄文人の子孫が住んでいたところに渡来人たちがコロニーを作ったことを想像」させ、「北部九州では在来集団と渡来集団がすみ分けていた」と述べた。大規模渡來說（1987・1991・1993・1995）の提唱からもわかるように、縄文時代から弥生時代への移行における形質の大きな変化において「渡来」から「置換」に近いイメージに変質していったように思われる。この点に関しては、中橋（1987）が「金関のいわゆる「渡來說」がようやく容認されるにいたり、最近では逆に金関が考えていたよりも多く広範囲の影響を渡来人に求める見解も聞かれて、かつての人種置換説に近づきそうな気配さえ窺われる。」と述べている通りである。

いわゆる「渡来系」弥生時代人が、「渡来人そのもの」であるという前提に基づく研究はその後も散見される。しかし、「渡来の規模」をめぐる人口動態の諸研究（田中1991, 田中・小澤2001, 中橋1993, 中橋・飯塚1998・2008）と、さらに、弥生時代の集落動態や土器製作など文化的諸現象を対象とした考古学の分野からより多くの批判や反証が重ねられてきた（森・岡崎1961, 森1966, 岡崎1968, 小澤2000・2009, 橋口1985・1990, 下條1986・2014a・2014b, 田中1986・1991, 宮本2012, 端野2014, 三阪2014, 下條・田中2014）。田中（1991）や

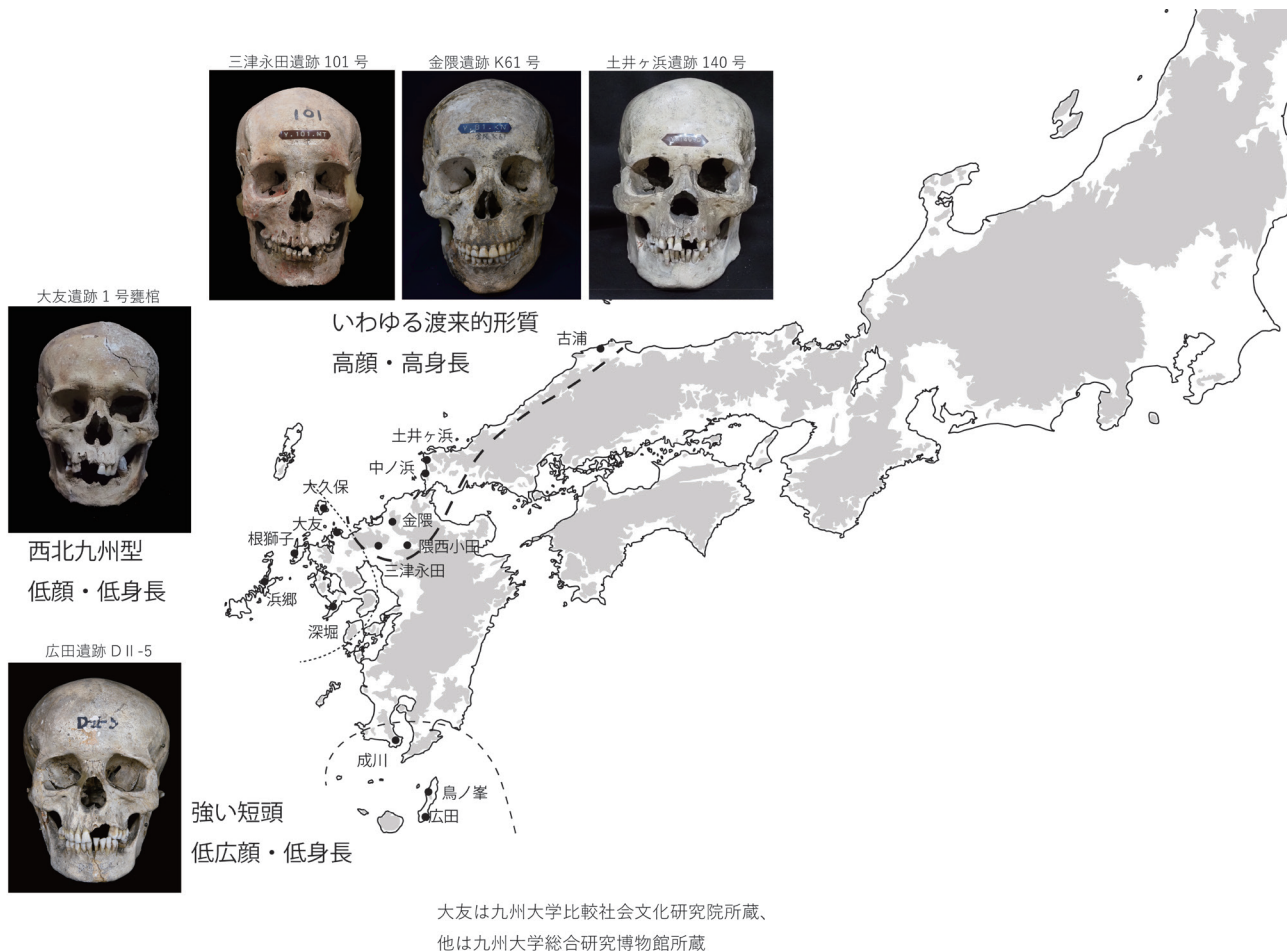


図1 弥生時代の地域性

中橋（1993d, 中橋・飯塚1998・2008）の研究によって、小規模の渡来でも急激な人口増加により、形質の変化が行われうることが検証された。縄文時代の晩期前葉～中葉に、福岡平野を中心とした人口密度の低い地域で小規模の渡来が散発的に起こり、結果として局所的に渡来人と混血した人々の人口比率が高くなり、当地域で混血した人々がいわゆる「渡来的弥生人」として人口増加を契機に各地へ拡散、各地の在来集団との婚姻によって各地の弥生人の形質を形成していった（田中1991）と説明されている。

ほかにも、近年、DNA分析の技術革新により、北部九州の弥生時代人骨（福岡県那珂川市安徳台遺跡）のDNAを調べた結果、大陸からの渡来人そのものというわけではなく、在来人との混血が進んでいたことや、西北九州地域の弥生時代人骨（所属時期は弥生時代末）が、縄文系と渡来系弥生人の双方のゲノムを併せ持つことが明らかとなり（篠田他2019）、これまで形質や考古学的な研究から指摘されている通り、いわゆる「渡来系弥生人」

が列島で成立したことがDNA分析からも実証されるなど、その形質の成立に関して北部九州地域の人々が果たした役割が見直されている。

先学によって明らかにされてきた弥生時代の人骨の頭蓋形質にみられる地域性の大枠や移行期に関する議論は新たな大規模サンプルの調査や移行時期での人骨の発見があったわけではないため、現在においても大枠有効であろう。しかし、「渡来」という用語が与える印象は強く、混血というよりもむしろ置換に近い変化が起きたことを前提にした研究は根強い。いわゆる「渡来系」に関するイメージの非更新は、重ねられてきた多くの批判を「文化的諸現象」として切り捨ててきた結果でもあろうが、1989年に弥生人について体系的にまとめられて（中橋・永井1989）以降、各遺跡の報告書以外ではあまり検討が重ねられてこなかったこともその要因の1つではあろう。

また、弥生時代人骨の頭蓋形質の地域性が検討される場合、報告書などで各遺跡出土人骨の特徴が述べられる



図2 対象地図

表 1 対象資料一覧

遺跡名	所在	地域区分	個体数	計測データ
西新町	福岡市	早良平野周辺	2	第2解剖
藤崎	福岡市	早良平野周辺	5	第2解剖
有田 1 2 6	福岡市	早良平野周辺	1	中橋孝博氏データ
藤崎13次	福岡市	早良平野周辺	2	中橋孝博氏データ
藤崎32	福岡市	早良平野周辺	1	筆者計測
西新町10次	福岡市	早良平野周辺	2	筆者計測
高上石	糸島市	早良平野周辺	1	中橋1993
新町	糸島市		3	第2解剖
金隈	福岡市	福岡平野	28	第2解剖
席田青木	福岡市	福岡平野	1	中橋孝博氏データ
宮の後	福岡市	福岡平野	1	第2解剖
諸岡	福岡市	福岡平野	1	第2解剖
大野原	うきは市	朝倉周辺	1	第2解剖
栗山	朝倉市	朝倉周辺	4	第2解剖
栗山II	朝倉市	朝倉周辺	1	筆者計測
栗山V	朝倉市	朝倉周辺	1	筆者計測
大庭・久保	朝倉市	朝倉周辺	1	中橋孝博氏データ
大熊	京都府犀川町	遠賀川流域周辺	1	第2解剖
下三緒	飯塚市	遠賀川流域周辺	1	第2解剖
スタレ	飯塚市	遠賀川流域周辺	1	第2解剖
立岩	飯塚市	遠賀川流域周辺	2	第2解剖
大郎丸	飯塚市	遠賀川流域周辺	1	第2解剖
上り立	中間市	遠賀川流域周辺	1	第2解剖
松山	田川郡糸田町	遠賀川流域周辺	1	第2解剖
山村	飯塚市	遠賀川流域周辺	1	第2解剖
一の谷	春日市	春日周辺	15	第2解剖
春日	春日市	春日周辺	1	第2解剖
春日昇町	春日市	春日周辺	1	第2解剖
門田	春日市	春日周辺	3	第2解剖
西平塚	春日市	春日周辺	3	第2解剖
原	春日市	春日周辺	1	第2解剖
原田	春日市	春日周辺	1	第2解剖
向谷南	春日市	春日周辺	1	第2解剖
若葉台	春日市	春日周辺	2	第2解剖
伯玄社	春日市	春日周辺	2	第2解剖
観音堂	那珂川市	春日周辺	7	筆者計測
安徳台	那珂川市	春日周辺	2	筆者計測
隈第5(池の上)	筑紫野市	三国丘陵	2	第2解剖
隈・西小田	筑紫野市	三国丘陵	94	中橋孝博氏データ
道場山	筑紫野市	三国丘陵	2	第2解剖
永岡	筑紫野市	三国丘陵	13	第2解剖
津古(大山氏宅)	小郡市	三国丘陵	2	第2解剖
西島	小郡市	三国丘陵	1	第2解剖
ハサコの宮	小郡市	三国丘陵	8	第2解剖
正原	小郡市	三国丘陵	3	第2解剖
三沢	小郡市	三国丘陵	2	第2解剖
横隈上内畑・中内畑	小郡市	三国丘陵	1	筆者計測
横隈山	小郡市	三国丘陵	1	第2解剖
津古牟田2	小郡市	三国丘陵	1	中橋孝博氏データ
津古牟田4	小郡市	三国丘陵	3	筆者計測
津古牟田7	小郡市	三国丘陵	5	筆者計測
横隈狐塚7	小郡市	三国丘陵	11	筆者計測
吉ヶ浦	太宰府市	三国丘陵	6	第2解剖
土井ヶ浜	下関市	山口	77	第2解剖
中ノ浜	下関市	山口	55	第2解剖
吉母浜	下関市	山口	5	第2解剖
塚崎東畑(高三瀬)	久留米市	佐賀東部	1	中橋孝博氏データ
大友(中橋2001)	唐津市		4	筆者計測
旭	鳥栖市	佐賀東部	1	第2解剖
上地	鳥栖市	佐賀東部	3	第2解剖
上峯	鳥栖市	佐賀東部	1	第2解剖
切通	鳥栖市	佐賀東部	4	第2解剖
基山	基山町	佐賀東部	1	第2解剖
松葉	吉野ヶ里町	佐賀東部	1	第2解剖
三津	吉野ヶ里町	佐賀東部	20	第2解剖
中津隈	みやき町	佐賀東部	2	第2解剖
小洞	佐賀市	佐賀東部	1	第2解剖

場合を除いて、西北九州と南九州、そして北部九州・山口地域という明確に形質の異なる3地域にわけた比較が主である(図1, 松下・内藤1989)。各報告書においては単一の遺跡から出土した人骨の特徴の記載をメインとするため、特に小規模な遺跡も多い北部九州地域内における形質の地域性が明確化されたことはない。1989年以降の資料の増加にもかかわらず、その形質確立の中心となった北部九州地域で体系的な検討がなされていないという点は大きな不足であろう。そこで、本研究では、1989年以降資料が増加している北部九州地域の弥生時代人骨の頭蓋形質についての検討を行う。

資料と方法

人骨の年齢推定は、恥骨結合面はSakaue(2006)を、耳状面はLovejoy(1985)、歯牙の咬耗は柄原(1957)を用い、性判定には、Buikstra and Ubelaker(1994)の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』(九州大学医学部解剖学第二講座編, 1988)記載の区分に従い、乳児0~1歳、幼児1~6歳、小児6~12歳、若年12~20歳、成年20~40歳、熟年40~60歳、老年60歳以上、成人は20歳以上(詳細は不明)とする。計測はMartin-Saller(1957)に従った。対象とした遺跡は、表1・図2(地図)に示したとおりである。資料は九州大学総合研究博物館および比較社会文化研究所蔵である。計測値は、九州大学九州大学医学部解剖学第二講座編(1988)の『日本民族・文化の生成2』掲載の計測値、中橋孝博氏の計測データ、筆者による計測が存在する(表1に詳細を記す)。

対象とした資料は表1・図2に示したとおりである。本稿では男性のみを対象としており、女性の形態的特徴や性差に関する分析は別稿に記す予定である。分析においてはまず北部九州地域を早良平野周辺・福岡平野周辺・春日周辺・三国丘陵・朝倉周辺・遠賀川流域周辺の5つに分けた。新町遺跡出土人骨はその时期的特徴を鑑み、どの地域にも含めずに分析を行った。ほかにも山口地域の弥生時代人骨(九州大学九州大学医学部解剖学第二講座編1988, 中橋・永井1989a)と佐賀東部の弥生時代人骨(Doi and Tanaka 1987, 九州大学九州大学医学部解剖学第二講座編1988), 大友遺跡出土の弥生時代人骨

表2 基礎統計量

	福岡平野周辺			早良平野周辺			福岡・早良平野			春日周辺			三国丘陵			新町			
	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M		
1頭蓋最大長	25	182.88	4.79	9	184.78	6.18	34	183.38	5.16	20	182.40	4.89	94	183.64	5.19	2	184.00	5.66	
8頭蓋最大幅	21	141.86	3.35	8	142.00	2.67	29	141.90	3.13	20	142.45	3.90	89	142.07	5.57	2	142.00	0.00	
17Ba.-Br.高	25	136.32	3.73	3	137.67	4.16	28	136.46	3.72	19	137.32	3.97	73	138.68	4.18	2	133.50	6.36	
8/1 頭長幅示数	25	77.84	2.58	8	75.68	1.97	33	77.31	2.59	19	78.05	2.30	84	75.69	8.62	2	77.20	2.40	
17/1 頭長高示数	23	74.82	2.08	4	73.20	0.86	27	74.58	2.02	20	75.81	2.30	72	75.49	2.63	2	72.55	1.20	
17/8 頭幅高示数	22	96.52	3.93	4	98.39	2.19	26	96.81	3.74	19	96.74	2.67	70	97.59	4.37	2	94.00	4.53	
45頬骨弓幅	12	140.17	3.41	3	139.33	4.16	15	140.00	3.42	11	138.64	4.34	39	140.51	5.28	1	134.00	-	
46中顔幅	21	104.19	4.59	3	104.33	7.37	24	104.21	4.80	16	103.00	5.19	57	104.87	4.70	1	94.00	-	
48上顔高	25	74.76	4.08	3	75.33	1.15	28	74.82	3.86	24	74.83	4.87	81	75.56	4.19	1	65.00	-	
48/45 上顔示数 (K)	24	53.11	2.40	3	54.22	2.22	27	53.24	2.36	22	53.35	2.94	66	53.99	2.46	1	48.50	-	
48/46 上顔示数 (V)	25	71.78	4.45	3	69.83	1.19	28	71.57	4.25	22	72.19	3.46	65	71.73	9.08	1	69.10	-	
51眼窩幅	23	42.52	1.34	6	43.33	1.51	29	42.69	1.39	25	43.04	1.65	74	43.15	1.61	1	43.00	-	
52眼窩高	23	34.17	1.64	5	33.80	1.79	28	34.11	1.64	24	34.08	2.15	74	34.96	1.89	1	35.00	-	
52/51 眼窩示数 (左)	23	80.41	4.35	5	77.91	3.59	28	79.97	4.27	23	79.32	4.64	72	81.24	4.99	1	81.40	-	
54鼻幅	28	27.00	2.16	5	25.60	1.14	33	51.45	4.40	27	27.00	1.59	91	26.85	1.80	1	26.00	-	
55鼻高	27	52.00	2.83	5	53.80	1.10	33	26.79	2.09	28	52.61	3.05	93	53.18	2.74	1	46.00	-	
54/55 鼻示数	28	52.14	4.34	5	47.61	2.42	32	52.28	2.70	26	51.49	3.39	86	50.19	6.81	1	56.50	-	
	朝倉周辺			遠賀川流域周辺			佐賀東部			大友			山口			西北九州		津雲・吉胡	
	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	S.D	N	M	N	M
1頭蓋最大長	4	185.50	2.65	5	185.80	1.92	26	183.00	5.97	24	183.70	4.39	52	182.80	6.61	21	182.80	60	184.20
8頭蓋最大幅	5	142.60	2.79	5	144.40	2.97	22	143.60	4.07	24	143.29	4.38	54	142.60	4.04	20	144.90	62	144.90
17Ba.-Br.高	5	141.40	3.58	5	137.40	3.85	14	137.50	5.27	20	135.55	4.22	43	134.70	4.26	15	134.60	26	135.50
8/1 頭長幅示数	4	76.96	1.08	3	77.10	0.44	21	78.30	2.08	21	78.30	2.93	48	78.10	3.43	20	79.20	55	78.70
17/1 頭長高示数	4	76.94	1.56	3	74.77	1.33	14	75.10	2.94	14	75.10	2.73	42	73.70	2.77	15	74.20	25	73.30
17/8 頭幅高示数	5	99.17	2.43	3	96.53	2.05	13	95.40	3.77	13	95.40	3.69	43	94.30	3.80	14	93.10	26	93.60
45頬骨弓幅	3	144.00	1.00	3	139.67	4.16	14	138.40	5.58	9	140.67	5.06	27	139.40	4.26	12	138.40	16	141.00
46中顔幅	4	107.50	4.36	5	100.80	4.97	24	105.20	4.12	24	101.83	5.09	27	103.40	3.89	17	105.00	31	103.80
48上顔高	5	74.00	6.56	6	74.00	3.52	23	73.90	4.22	16	66.63	3.18	35	72.40	2.00	17	68.10	28	66.30
48/45 上顔示数 (K)	4	53.66	2.07	4	51.58	2.52	13	53.30	2.48	7	47.55	2.11	21	51.90	1.15	12	49.30	10	47.00
48/46 上顔示数 (V)	4	70.81	4.56	7	70.10	6.60	22	70.50	3.72	15	64.46	1.95	31	70.00	2.50	17	64.80	22	63.10
51眼窩幅	4	43.00	2.58	6	43.67	1.75	20	43.80	2.05	23	43.96	2.11	38	42.70	1.44	15	43.10	40	43.20
52眼窩高	4	35.25	1.50	8	35.00	1.85	20	34.50	2.24	24	33.54	1.95	40	34.20	1.06	15	32.80	38	33.20
52/51 眼窩示数 (左)	4	82.20	6.10	6	78.48	4.93	20	79.00	4.54	22	76.48	5.28	38	80.10	3.11	15	76.20	32	77.50
54鼻幅	6	27.47	1.79	7	26.71	1.70	20	27.00	1.19	25	27.36	1.56	38	27.10	1.68	16	27.80	36	26.50
55鼻高	5	53.21	5.12	7	52.71	2.29	21	52.20	2.53	23	50.74	2.74	39	53.10	2.11	16	51.00	30	48.10
54/55 鼻示数	5	51.38	5.19	7	50.77	3.82	19	51.50	3.18	22	54.49	3.89	37	51.00	3.09	16	54.40	27	54.70

N = 個体数、M = 平均値、S.D = 標準偏差

Doi and Tanaka(1987)

Matsushita(1981)

中橋・永井(1989a)

清野・宮本(1926)・金高(1928)

内藤(1971)

(平均値は松下1981, 個体の値は中橋2001), 西北九州弥生時代人(内藤1971), さらに縄文時代の津雲・吉胡(清野・宮本1926・金高1928)を用いている。

結果

各地域の基礎統計量を表2に示す。

頭蓋最大長が最も大きいのは遠賀川流域周辺(185.80), 次いで朝倉周辺(185.50)であり, 最も小さいのは春日周辺(182.40)である。頭蓋最大幅は, 津雲・吉胡(144.90)や西北九州(144.90)が最も大きく, 次いで佐賀東部(143.60)であり, 新町(142.00), 朝倉周辺(142.60), 三国丘陵(142.07)が小さい。Ba-Br高は朝倉周辺(141.40)が最も高く, 新町(133.50)が最も低い。

頭長幅示数(8/1)が最も大きい, すなわち脳頭蓋の幅が相対的に広いのは, 最大幅の広い津雲・吉胡(78.70)や西北九州(79.20)であり, 次いで大友(78.30)であるが, 佐賀東部(78.30)も同様の値を示す。対して, 頭長幅示数(8/1)が最も小さい, 脳頭蓋の幅が相対的に狭いのは, 三国丘陵(75.69)と早良平野周辺(75.68)である。頭長高示数(17/1)が最も大きい, すなわち脳頭蓋の高さが相対的に高いのは朝倉周辺(76.94), 次いで春日周辺(75.81), 三国丘陵(75.49)であり, 対して新町(72.55)が最も小さい。頭幅高示数(17/8)が最も大きい, すなわち脳頭蓋の幅径に対して高さの値が大きいのは, 朝倉周辺(99.17)であり, 反対に最も小さいのは津雲・吉胡(93.6)と西北九州(93.1)である。Ba-Br高が最も小さい新町が最小ではないのは頭蓋最大幅との関係である。

上顔高の値が最も大きいのは三国丘陵 (75.56) で次いで早良平野周辺 (75.33) である。新町 (65.00) は 9 号人骨 1 体の値であるが最も低い。顔面部の幅径をみると、頬骨弓幅も中顔幅も朝倉周辺が最も大きく (144.00・107.50)、最も小さいのは新町 (9 号 : 134.00・94.00) である。上顔示数 (K・48/45) が最も大きいのは早良平野周辺 (54.22)、次いで三国丘陵 (53.99) であり、最も小さいのは津雲・吉胡 (47.00)、次いで大友 (47.60) である。新町 (48.50) は西北九州 (49.30) よりも小さい。上顔示数 (V・48/46) が最も大きいのは春日周辺 (72.19)、

次いで福岡平野周辺 (71.78)、三国丘陵 (71.73) であり、最も小さいのは津雲・吉胡 (63.10)、次いで大友 (64.50)、西北九州 (64.80) である。眼窩幅の値が最も大きいのは大友 (43.96)、小さいのは福岡平野 (42.52) であり、眼窩高の値が最も大きいのは朝倉周辺 (35.25)、最も小さいのは津雲・吉胡 (33.20) である。眼窩示数 (52/51) が最も大きい、すなわち眼窩が幅径に対して相対的に高いのは、朝倉周辺 (82.20)、次いで三国丘陵 (81.24)、最も小さいのは西北九州 (76.20) である。鼻幅が最も大きいのは西北九州 (27.80)、最も小さいのは早良平野周辺

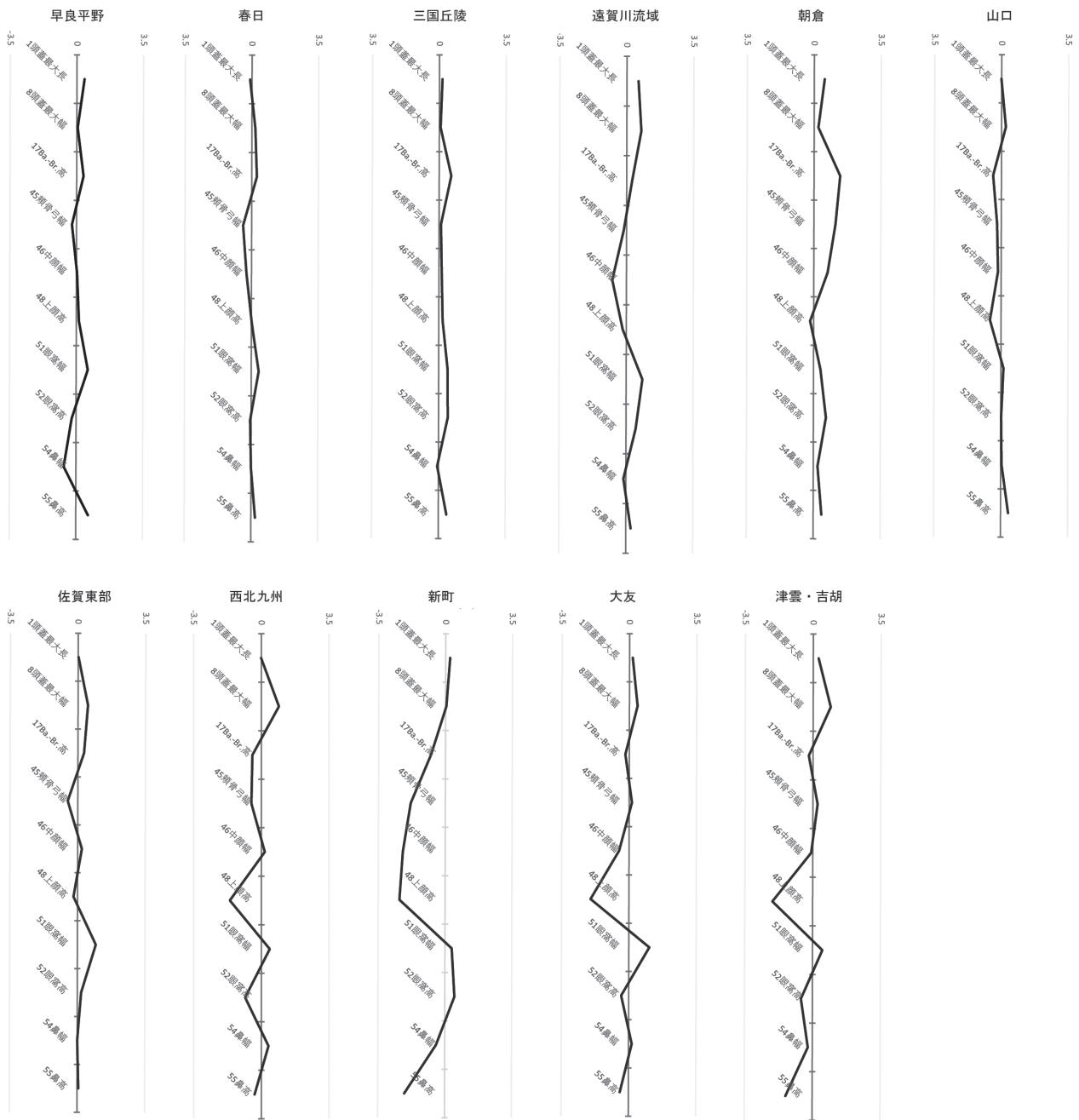


図3 偏差折線

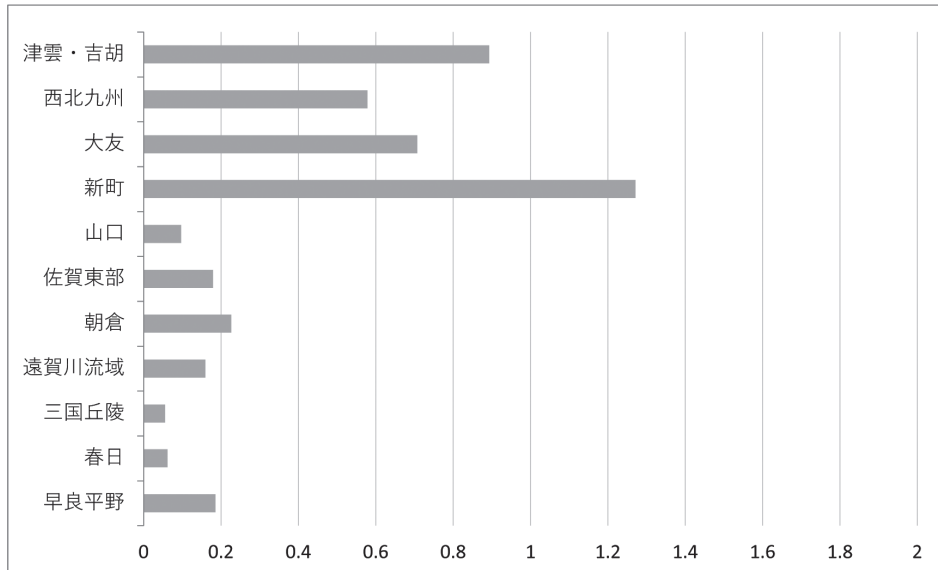


図4 Penroseの形態距離(頭蓋9項目)

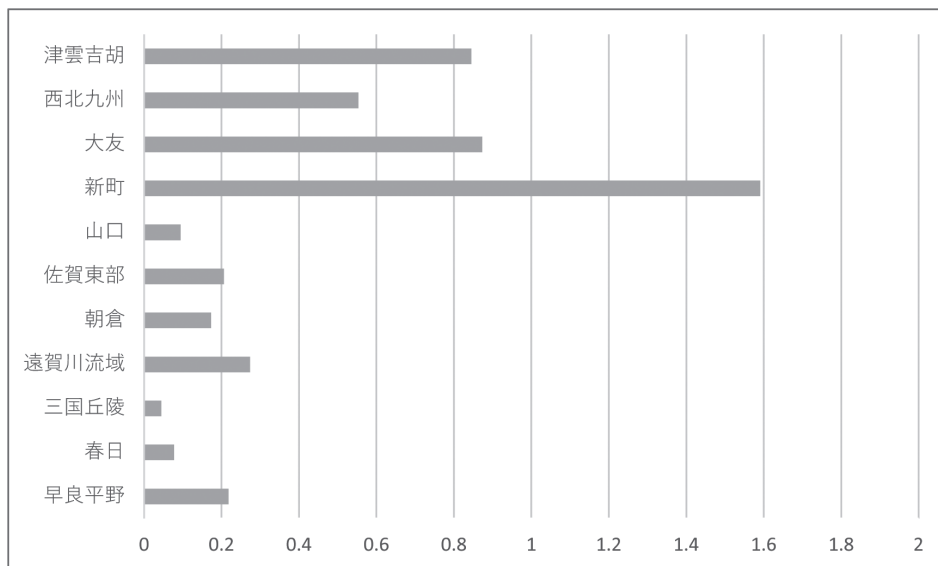


図5 Penroseの形態距離(顔面部7項目)

(25.60)であり、鼻高が最も大きいのは早良平野周辺(53.80)、最も小さいのは津雲・吉胡(48.10)である。鼻示数(54/55)が最も大きい、すなわち鼻腔の高径に対して幅径が相対的に広いのは、新町(56.50)、次いで津雲・吉胡(54.70)、最も小さい(幅が狭い)のは早良平野周辺(47.61)である。

先述した頭蓋骨の主要計測項目における各地域集団の類似や相違を検討する(以下、周辺を省略する)ため、福岡平野の集団を基準とする偏差折線を示した(図3)。値が0に近いほど差がないことをしめすものである。まず目につくのは、新町、西北九州、大友、津雲・吉胡な

ど、低顔が指摘される諸集団との差が際立ち、特に上顔高を最大として、Ba-Br高・眼窩高・鼻高の値は福岡平野よりも概して小さい。一方で北部九州地域、山口地域、佐賀東部の各集団との差はいずれの項目においても相対的に小さい。朝倉は上顔高以外の諸計測項目に関して福岡平野よりも大きい傾向を示すが個体数の少なさに起因する可能性が高い。図3より注目されるのは、新町である。1個体の値であるため極端な傾向を示していると考えられるが、西北九州、大友、津雲・吉胡とは傾向が異なり、上顔高だけでなく、中顔幅や頬骨弓幅も福岡平野と比較すると小さい。また、眼窩幅だけでなく、眼窩高

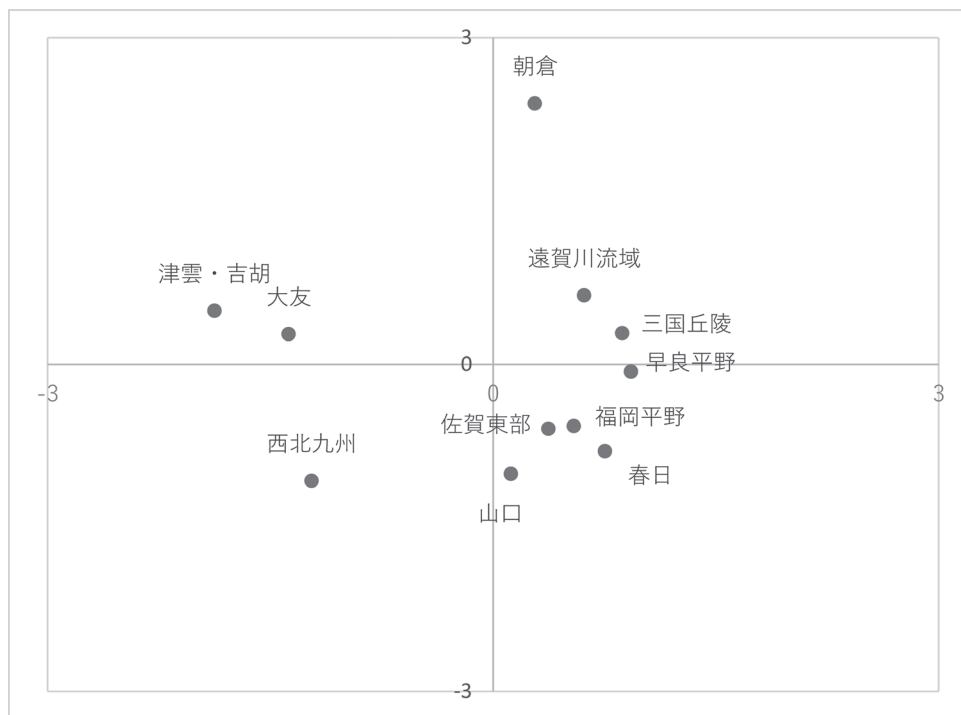


図6 頭蓋10項目を用いた主成分分析の2次元展開図

表3 主成分負荷量

	1	2	3
1 頭蓋最大長	0.095	0.825	-0.365
8 頭蓋最大幅	-0.709	-0.013	-0.248
17 Ba.-Br. 高	0.562	0.749	0.252
45 頬骨弓幅	-0.106	0.905	0.209
46 中顔幅	0.109	0.302	0.931
48 上顔高	0.991	0.039	0.096
51 眼窩幅	-0.213	0.174	-0.470
52 眼窩高	0.725	0.521	-0.052
54 鼻幅	-0.348	-0.018	0.324
55 鼻高	0.894	0.040	0.061
固有値	3.324	2.458	1.511
寄与率	33.239	24.579	15.113
累積寄与率	33.239	57.818	72.931

も福岡平野と比較すると値が大きい点も西北九州，大友，津雲・吉胡との違いである。

以上の類似点・相違点を総合する意味で，頭蓋の9項目（M1, 8, 17, 45, 48, 51, 52, 54, 55）を用い，福岡平野を基準として Penrose の形態距離を求めた（図4）。偏差折線での分析結果と同様に，北部九州・山口地方のいわゆる渡来系とされる各集団と福岡平野の集団の形質的な差は極めて小さい。一方で，新町とは最も差が大きい。他にも津雲・吉胡および弥生時代の中でも低顔傾向を示す

西北九州や大友の集団ともかなりの距離をみせている。

中橋（1985）において脳頭蓋よりも顔面部に西北九州の弥生時代人や縄文時代の人々との相違がみられることが指摘されているため，顔面部7項目（M45, 46, 48, 51, 52, 54, 55）に絞って検討を行った（図5）。先ほどと同様，新町と最も差が大きい。他にも津雲・吉胡および弥生時代の中でも低顔傾向を示す西北九州や大友の集団ともかなりの距離をみせている。北部九州・山口地方のいわゆる渡来系とされる各集団との距離は小さいが，三国丘陵や春日の人々よりも早良平野・遠賀川流域・朝倉・佐賀東部の弥生時代集団のほうがやや距離が離れることがわかる。

さらに，地域性に関していずれの計測項目が寄与するのかを明らかにするため頭蓋計測値10項目（M1, 8, 17, 45, 46, 48, 51, 52, 54, 55）を用いて主成分分析を行った（図6）。これまでの分析で新町との差が最も大きかったが，9号人骨1体の値であり，他集団よりも極端な値を示していると考えられるため，本分析からは除いている。分析に際してバリマックス法による回転を行っている。第1主成分は固有値3.324，寄与率33.239%，第2主成分は固有値2.458，寄与率24.579%，第3主成分は固有値1.511，寄与率15.113%である（表3）。第1主成分は頭蓋最大幅・頬骨弓幅・眼窩幅・鼻幅と負の相関を示し，

頭蓋最大長・Ba-Br 高・中顔幅・上顔高・眼窩高・鼻高と正の相関を示す。中顔幅のみ幅径で正の相関を示すが、脳頭蓋および顔面部において幅径が大きいとマイナスの値を示し、特に顔面部の高さの諸径が大きいとプラスの値を示す。すなわち、いわゆる渡来系の形質を強く有する集団ほど第1主成分得点がプラスに偏ると言えよう。第2主成分は頭蓋最大幅と鼻幅と負の相関を示すが極めて小さいため、おおむねサイズファクターと言えよう。第1主成分を横軸に、第2主成分を縦軸にとり二次元展開した図が図6である。

横軸で正の得点が高いのは三国丘陵・早良平野・春日の各集団である。次いで福岡平野、さらに佐賀東部・山口と続く。遠賀川流域は、第1主成分得点は福岡平野と同程度であるが、全体サイズがやや大きい。朝倉は、第1主成分得点は佐賀東部と同程度であるが全体サイズがやや大きい。この2地域の第2主成分得点での傾向は個体数が少ないことと関連すると考えられる。いずれの集団も、縄文時代の津雲・吉胡や西北九州の弥生時代人骨と比べると高顔性をもついわゆる渡来系の形質を示すが、山口・佐賀東部・朝倉・遠賀川流域・福岡平野よりも三国丘陵や春日・早良平野のほうが高顔性は強い。

さらに、個体を対象として顔面諸項目 (M46, 48, 51, 52, 54, 55) を用いて主成分分析を行った (表4・図7)。比較対象として用いている津雲・吉胡、西北九州、大友 (1981) は平均値である。個体の計測項目を対象とするため個体数が減るが、これまで指摘してきた渡来的形質の地域をこえた「均質性」の実態の検討および新町の特徴を読み取ることが目的としている。また、この分析では大友 (中橋2001b) の個体の計測値および土井ヶ浜・吉母浜・佐賀東部の個体の値 (九州大学医学部解剖学第2

講座1988) も用いている。

第1主成分は固有値2.860、寄与率47.672%、第2主成分は固有値1.272、寄与率21.201%であり、第1主成分はサイズファクター、第2主成分は幅諸項目と正の相関を高さの諸項目と負の相関を示すため、第2主成分得点がマイナスになると高顔性が強いといえる。この分析は個体変異をそのまま含みこむため、あくまで目安であるが、第2主成分得点を棒グラフで表現した図が図7である。津雲・吉胡、西北九州・大友 (1981) がいずれもプラスの値を示すことからわかるように、顔面の高径が低い・幅径が大きいとプラスをしめす。福岡平野・春日・三国丘陵に関してはわかる限り時期ごとに配列し、各地域内で左側に位置するほうが時期的に古い。なお、個体の保存状態の関係で、福岡平野はほぼ金隈遺跡出土、山口は土井ヶ浜遺跡出土の人骨であり、それ以外の地域は様々な遺跡から出土している。

いずれの地域においてもマイナスの値を示す高顔性の強い個体と、プラスの値を示す低顔性の個体が時期的な偏りもなく存在することがわかる。図6で北部九州・山口地域内で最も高顔傾向が弱いとした山口地域 (図7の一番右の1体を除いて土井ヶ浜出土) では低顔性を示す個体の割合が最も多い。さらに新町遺跡出土9号人骨はマイナスの値を示し、低顔傾向にあるとは言えない。

考察

本稿では、北部九州地域内における弥生時代人骨の頭蓋形質の地域性について検討を行った。その結果、縄文時代の津雲・吉胡や西北九州の弥生時代人骨と比べると、北部九州地域、さらには山口地域を含めても、高顔という点において類似性が高い集団が存在したことが追認された。

しかし、内部において若干の差は認められ、ペンローズの距離では朝倉・遠賀川流域・佐賀東部がやや離れる傾向が認められた。主成分分析では、朝倉と山口は顔高がやや低い傾向にあると言える。早良平野や春日・福岡平野・三国丘陵などでより強い高顔性を示し、周辺部にあたる飯塚・遠賀川流域・佐賀東部、さらに山口は相対的に顔高が低くなっていく傾向も先学 (Doi and Tanaka 1987, 中橋・永井1989a) の指摘を追認するものである。

表4 個体の主成分負荷量

	1	2
46 中顔幅	0.697	0.412
48 上顔高	0.814	-0.375
51L 眼窩幅	0.568	0.439
52L 眼窩高	0.629	-0.499
54 鼻幅	0.460	0.674
55 鼻高	0.884	-0.257
固有値	2.860	1.272
寄与率	47.672	21.201
累積寄与率	47.672	68.873

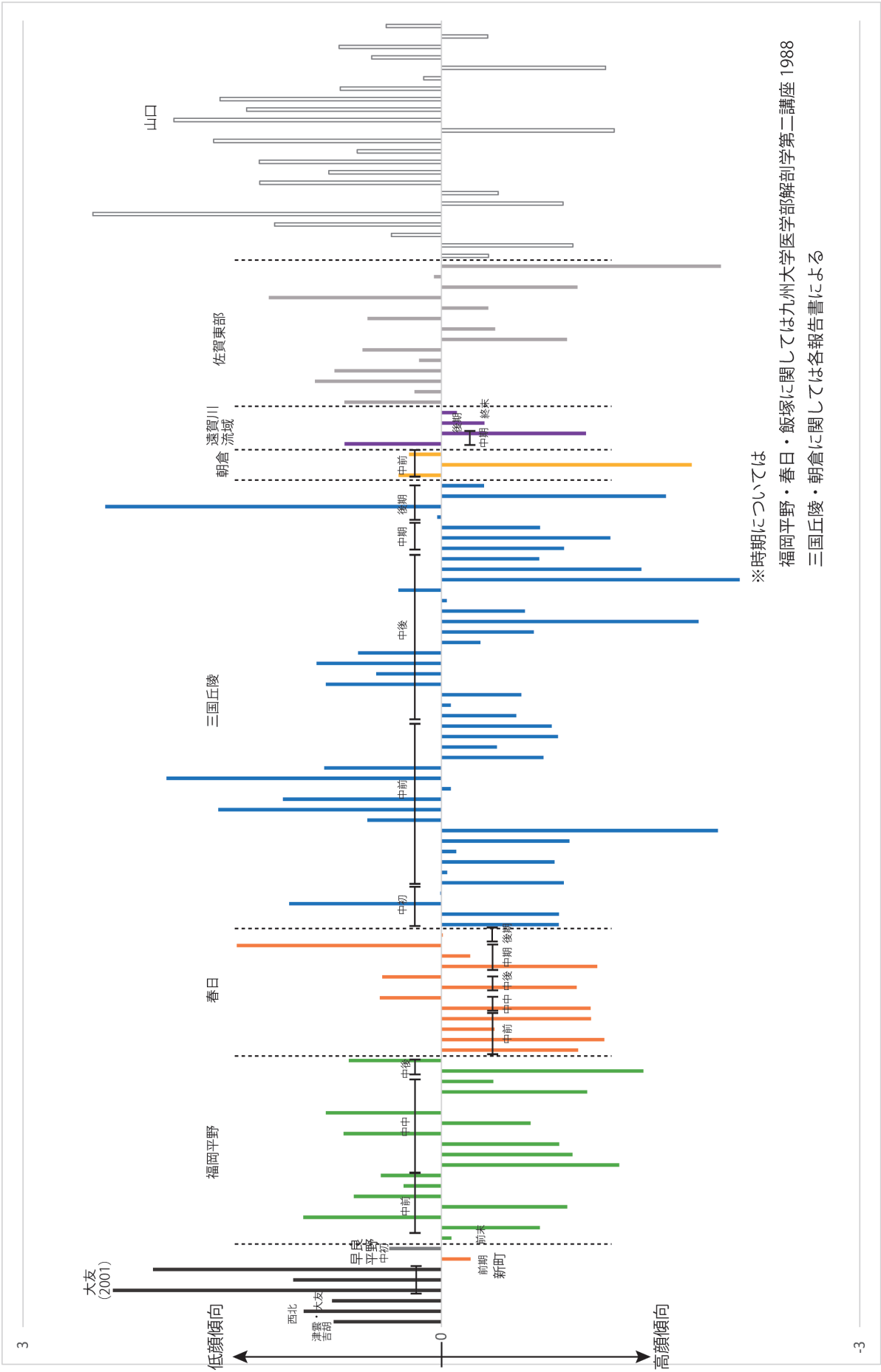


図7 個体分析結果

中橋 (1990a・1993d・2001a) 以来、岡崎・重松 (2003)、星野・米元他 (2021) など、三国丘陵域の人々に関しては高顔性が他地域よりも際立つことが指摘されてきた。これは金隈を中心とする北部九州地域や土井ヶ浜との比較で指摘されてきたことであった。しかし、今回、地域ごとに分けて検討した結果 (図6)、福岡平野や山口と比較すると若干の高顔傾向は認められるが、春日や早良平野とは同程度であり、またそこまで著しい差ではないということが明らかとなった。

本研究で北部九州内を小地域に区分した場合においても追認された、北部九州域に高顔性・高身長という点において均質な人々が展開したこと、近郊の西北九州では異なる形質を有する集団が存在するという結果から、渡来説はその支持を得、さらに渡来人と縄文的な在来の人々の間で住み分けが行われたかのようなイメージを生んだ。しかし、すでに先学において繰り返し指摘されていることではあるが、多くの人々が北部九州へ渡ってきたことを想定するには、かれらの居住痕跡は少なすぎるのである (橋口1985, 中橋1993・2005, 中島1996, 田中・小澤2001)。これは、発掘の偏りや調査事例の少なさ等に帰すことのできない成果である。渡来人の生活痕跡の可能性としては、弥生時代前期末～中期初頭の大きな特色の1つに朝鮮南部の後期無文土器に限られた集落遺跡 (諸岡遺跡・横隈北田・横隈鍋倉遺跡・三国の鼻遺跡・横隈山遺跡) の一角で数多く出土することが指摘されている (中島1996, 武末2011)。ほかにも佐賀県の土生遺跡では前期末～中期前半の弥生土器とともに少量の水石里式無文土器と多くの擬無文土器の出土が指摘されている (片岡1999)。しかし前者は集落の一角への一時的な居住であり (橋口1987・1999, 中島1996)、後者は時期とともに弥生土器の要素をとり入れ変質していく、すなわち地域社会に同化していく過程を読み取ることができる (武末2011) と指摘されており、大規模な渡来人や明確な住み分けが各地域で安定的に確認できるわけではない。北部九州の集落動態の研究 (橋口1987, 小沢2000・小澤2009, 山崎など2005, 山崎2010など) によると、弥生時代の前期から後期までに幾度か稲作の確立や人口増加などを契機として集落の立地や規模・構成が変化していることが指摘されているが、この中に、「渡来人」なるものの存在の根拠を安定的に見いだすことはできない。形質の激変と文化的諸現象におけるその不在は、相矛盾する

ものではなく、北部九州その地でいわゆる「渡来系」の形質が確立し、渡来人はその中に埋没していると考えられることで説明可能であろう。

さらに、個体数が減ってしまうため、あくまで予察的な検討となったが、個体を対象とし顔面部の諸径のみを用いた検討を行った。保存状態の極めて良好な個体にしかこの分析を行えていないことや個体数の確保の関係で頬骨弓幅ではなく中顔幅を用いている点が、分析結果のバイアスになっている可能性はある。今後ほかの属性を用いてさらなる検討を行う予定であるが、図7で明らかかなようにどの地域のどの時期においても低顔性を示す個体は確認された。また、土井ヶ浜を主体とする山口地域や佐賀東部ではその割合が増加することも読み取れる。同様の分析は、用いた変数は異なるが中橋・永井 (1989a) において判別関数を用いて行われており、本研究において土井ヶ浜や佐賀東部に関してはこの結果を追認するとともに、北部九州をさらに細分した場合いずれの地域・時期においても高顔性の個体も低顔性の個体もほぼ同程度存在することが明らかとなった。

本稿で分析対象とした弥生時代人骨は弥生時代中期を主体とし、稲作の開始とともに大陸から最初に人が渡来した時期より遅れ、さらに著しい人口増加が起こった前期末～中期初頭よりも後の時期に埋葬された人々が大多数を占める。弥生時代において確認される低顔形質を有する個体は、便宜的に在来的なあるいは縄文的な形質を有するという言い方で説明される場合も多いが、先にも述べたように居住域の区分が行われた形跡はほとんどなく、時期的な隔たりも大きいことから、縄文時代の人々の直接的な後継ではありえない。松下・内藤 (1989) が「海浜部からは「低・広顔」で縄文人的な弥生人、平野部＝「高顔・高身長」という図式」が存在すると述べているが、個体のレベルで考えると地域によって形質が異なるという単純な図式はそもそも成立していない。彼らは墓地を共有し、居住域においても継続して住み分けるような状況は確認されていないことから、時期を問わず、いずれの地域にも高顔性と低顔性の人々がそれぞれ一定数存在するという結果は混血が進む中で生じる多様な形質発現の一端にすぎないと考えるのである。

本分析では、佐賀東部や朝倉、遠賀川流域、山口などの地域で高顔傾向が相対的に弱い (図6) という点、個体の分析において、山口地域で低顔傾向の個体数がや

や多い(図7)こと、高顔性のやや強い3地域の1つである三国丘陵からも福岡平野と同程度に低顔傾向の個体が確認されること(図7)が明らかとなった。この分析から、初期の渡来人の存在は確かに列島へのいわゆる渡来的形質の定着に重要な役割を果たしたが、北部九州地域で起きた人口の激増を経て、当該地域で弥生時代の人々の高顔性は確立し、高顔性という点において均質にみえつつも、個体レベルでは多様な形質が発現していたことが推察される。この地域における形質の地域性は中橋(1989)や田中(1991, 2014)、田中・小沢(2001)、が指摘する、高顔性を有するいわゆる渡来系弥生人が各地に到達した当初の在来の住人との人口比によって生じた、混血が進む中で生じる多様な形質発現を一因とするものだろう。

また、図7において新町遺跡の9号人骨は明瞭な低顔性を示すわけではないことも指摘できよう。表2や図3で示されるように、顔高は確かに低いが、同時に頬骨弓幅や中顔幅の値が小さいことに起因する。縄文的あるいは西北九州的な形質を有するというよりもむしろ顔面部の全体サイズが小さいことがその特徴なのではないかと考えることもできる。表2の頭長幅示数(77.20)が北部九州地域の弥生時代人骨とあまり変わらないことも縄文的あるいは西北九州的な形質と新町9号の形質の違いとして指摘できよう。新町9号人骨については、顔示数(K)をみると津雲・吉胡に近い値を示し、また、中橋は高顔性以外にも抜歯風習や身長なども併せて縄文時代的な特徴を有していることを指摘しているため、「頬骨の側方への張り出しがやや弱い点は繊細化の兆候をうかがわせるが、全体的な統計分析の結果からも渡来系とされる近在の金隈弥生人等と大きな形質的へだたりが明らかにされた」(中橋・永井1989b)、という見解の金隈弥生人等と大きな形質的へだたりがあるという点に反する意図はないが、眼窩示数は高い点なども含め、津雲・吉胡や西北九州のような人々の形質とも異なる点があるということは強調されるべきである。この点をふまえても、当該個体は中橋(2005)でも述べられているように、当時海峡をはさんだ半島と九州北部の沿岸部には密接な交流があったという1つの根拠であることは変わりがない。この低顔性を示す個体群については、今回比較に用いた津雲・吉胡のような本州の縄文時代人骨ではなく、弥生時代以前からの半島との交流も考慮することが可能な九

州島内の縄文時代人骨との比較検討を行う予定である。

おわりに

本稿では、均質な高顔性を有するとされ、しかし、1989年以降その地域性に関しての体系的な検討がなされていない北部九州弥生時代人骨の頭蓋形質の地域性に関する検討を行った。その結果、縄文時代の津雲・吉胡や西北九州の弥生時代人骨と比べると、北部九州地域、さらには山口地域を含めても、高顔という点において類似性が高い集団が存在したことが追認された。しかし、内部において若干の差は認められ、ペンローズの距離では朝倉・遠賀川流域・佐賀東部がやや離れる傾向が認められた。主成分分析では、朝倉と山口は顔高がやや低い傾向にあると言える。早良平野や春日・福岡平野・三国丘陵などでより強い高顔性を示し、周辺部にあたる遠賀川流域・朝倉・佐賀東部、さらには山口と相対的に顔高が低くなっていく傾向はDoi and Tanaka(1987)、中橋・永井(1989a)などの指摘を追認するものである。しかし、本稿で比較資料として用いた佐賀県や西北九州地域に関しては個体の計測データを得ることができていないため、これらの地域に関して得られた結果が今後変更される可能性もある。

一方で、これまで指摘されてきた三国丘陵地域の著しい高顔性と、新町遺跡9号人骨の顔面形質が縄文あるいは西北九州的という見解については再評価が必要であろう。

今後は、鼻根部など頭蓋骨のさらに詳細な部位の分析、女性の検討、北部九州地域の縄文時代人骨との比較など様々な面で継続して検討し、弥生時代に当地に生きた人々について考察を行っていく予定である。

謝辞

学生時代より多くのことを教えていただいた中橋孝博先生(九州大学名誉教授)・田中良之先生(故人)をはじめ、博物館で古人骨資料を管理し続けてくださった岩永省三先生(九州大学名誉教授)、舟橋京子先生(現・比較社会文化研究院)、九州大学比較社会文化研究院・人文科学研究院の先生方に深謝いたします。

毎週水曜日の実習を通して、人骨のクリーニング・報告書作成作業に尽力してくださった九州大学比較社会文化学府・地球

社会統合科学府・人文科学府・文学部人文学科考古学研究室・共創学部 共創学部の諸氏，さらに，発掘に携わった各市町村の埋蔵文化財関係諸氏に心より感謝を申し上げます。

参考文献

- Brace, C.L. and Nagai, M. 1982 Japanese Tooth Size: Past and Present. *American Journal of Physical Anthropology* 59:399-411.
- Doi, N. and Tanaka Y. 1987 A Geographical Cline in Metric characteristics of Kofun skulls from Western Japan. *Journal of the Anthropological Society of Nippon* 95 (3) :325-343
- 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム編 2014 土井ヶ浜遺跡－第1次～第12次発掘調査報告書－ 下関市文化財調査報告書第35集，土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム，下関
- 藤尾慎一郎 1999 福岡平野における弥生文化の成立過程－狩猟採集民と農耕民の集団関係－ 国立歴史民俗博物館研究報告77, 51-84
- 舟橋京子・金宰賢・田中良之 2000 横隈上内畑遺跡2出土人骨について 渡邊隆行編 横隈上内畑遺跡2－福岡県小郡市横隈所在遺跡の調査報告－小郡市文化財調査報告書第143集，小郡市教育委員会，小郡，pp.79-86
- 舟橋京子・岡崎健治・森口信哉 2001 第6章大友遺跡第5次調査出土石棺に伴う人骨およびその埋葬過程について 宮本一夫編 佐賀県大友遺跡－弥生墓地の発掘調査－平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究A(1)，九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室，福岡，pp.68-78
- Hanihara, K. 1987 Estimation of the number of early migrants to Japan: A simulative study. *Journal of the Anthropological Society of Nippon* 95:391-403
- Hanihara Kazuro 1991 Dual structure model for the population history of the Japanese. *Japan Review*, no. 2:1-33.
- 植原和郎 1993 渡来人に席卷された古代の日本 原日本人－弥生人と縄文人のナゾ－朝日ワンテーママガジン⑭ 朝日新聞社，東京，pp.6-29
- 植原和郎 1995 日本人の成り立ち 人文書院
- 橋口達也 1974 初期鉄製品をめぐる2・3の問題－福岡県吉ヶ浦遺跡出土の鉄器を中心にして－ 考古学雑誌60(1)，pp.1-17
- 橋口達也 1980 甕棺内人骨等に附着せる布・蓆 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会編 古文化論攷－鏡山猛先生古稀記念－，鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会，大宰府，pp.353-377
- 橋口達也 1985 日本における稲作の開始と発展 石崎曲り田遺跡Ⅲ 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集，福岡県教育委員会，福岡，pp.5-103
- 橋口達也 1987 集落立地の変遷と土地開発 岡崎敬先生退官記念事業会編 岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史 中 同朋舎，pp.703-754
- 橋口達也 1990 弥生文化成立期の日本と韓国 第4回国際シンポジウム 東アジアから見た日本稲作の起源，福岡県教育委員会
- 橋口達也 1999 弥生文化論－稲作の開始と首長権の展開－ 雄山閣
- 端野晋平 2014 渡来文化の形成とその背景 古代学協会編 列島初期稲作の担い手は誰か，すいれん舎，pp.79-124
- 星野宙也・米元史織・山下理呂・足達悠紀・諸岡初音・唐尚暉・永島さくら・出見優人・小高蒼大・松尾樹志郎・中野真澄・James Frances Loftus III・舟橋京子 2021 津古牟田遺跡第7次調査の埋葬状態と形質的特徴 津古牟田遺跡第7次調査，小郡市教育委員会，小郡，pp.61-109
- 春日市史編纂委員会編 1995 春日市史(上巻) 春日市
- 金関丈夫・甲斐庸禹 1955 福岡県浮羽郡大野原及び秋成発掘弥生式時代人骨に就いて 人類学研究2(1)，pp.72-92
- 金関丈夫 1955 弥生人種の問題日本考古学講座4. 河出書房，東京，pp. 238-252.
- 金関丈夫 1959 弥生時代の日本人 日本の医学－第5回日本医学会総会学術集會記録1，pp.167-174
- 金関丈夫 1972 日本人種論 考古学講座10 雄山閣，東京，pp.183-200
- 金関丈夫 1976 日本民族の起源 法政大学出版局
- 金関丈夫・永井昌文・佐野一 1960 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について 人類学研究第7巻附録－清野謙次博士記念特集号－，pp.1-36
- 片岡宏二 1999 弥生時代渡来人と土器・青銅器 雄山閣
- 九州大学医学部解剖学第二講座編 1988 日本民族・文化の生成2 六興出版
- 松尾樹志郎・富田啓貴・中野真澄・星野宙也・James Frances Loftus III・米元史織・舟橋京子 2020 栗山遺跡第5次調査出土人骨の埋葬状態と形質的特徴 栗山遺跡Ⅴ：朝倉市文化財調査報告書第36集，朝倉市教育委員会，朝倉，pp.39-59
- 松下孝幸他 1984 佐賀県千代田町託田西分貝塚出土の弥生時代人骨 解剖学雑誌59, p.411
- 松下孝幸 1981 大友遺跡出土の弥生時代人骨 呼子町教育委員会編 大友遺跡－佐賀県呼子町文化財調査報告書1－，呼子町郷土史研究会，pp. 223-253.
- 松下孝幸 1985 V. 人骨 1. 福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨 小郡市教育委員会編 横隈狐塚遺跡Ⅱ－福岡県小郡市横隈所在遺跡の調査報告－下巻 小郡市文化財調査報告書第27集，pp.1-46
- 松下孝幸・内藤芳篤 1989 3. 弥生人 3. 地域差 永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原真編，弥生文化の研究 1. 弥生人とその環境 雄山閣，pp.65-75
- 宮本一夫 2012 弥生移行期における墓制から見た北部九州の文化受容と地域間交流 古文化談叢67, pp.147-176
- 森貞次郎・岡崎敬 1961 福岡県板付遺跡 杉原壮介編 日本農耕文化の生成第一冊 東京堂，pp.37-77
- 森貞次郎 1966 弥生文化の発展と地域性 1九州 日本の考古学Ⅲ 弥生時代 河出書房，pp.32-80
- 三阪一徳 2014 土器からみた弥生時代開始過程 古代学協会編

- 列島初期稲作の担い手は誰か すいれん舎, pp.125-174
- 内藤芳篤 1971 西北九州出土の弥生時代人骨 人類学雑誌79, pp.236-248
- 中橋孝博 1998 5. 住居・集落と生活 小郡市史編集委員会編 小郡市史 第一巻通史編 地理・原始・古代 小郡市, pp.344-370
- 中橋孝博 1989a 3. 弥生人 2. 男女差 永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原眞編, 弥生文化の研究1: 弥生人とその環境 雄山閣, pp.52-64
- 中橋孝博 1989b 甕棺墓出土の人骨について 沢田康夫・茂和敏・宮原千佳子編, 観音堂遺跡群筑紫郡那珂川町大字片縄所在遺跡群の調査 那珂川町文化財調査報告書第20集, 那珂川町教育委員会, pp.1-11
- 中橋孝博 1990a 永岡遺跡出土の弥生時代人骨 向田雅彦編 永岡遺跡II - 福岡県筑紫野市大字永岡所在の遺跡調査 - 筑紫野市文化財調査報告書第26集, 筑紫野市教育委員会, 筑紫野, pp.183-204
- 中橋孝博 1990b IV. 科学分析 1. 福岡県小郡市津小牟田遺跡出土の弥生時代人骨 宮田浩之編, 津小牟田遺跡II - 福岡県小郡市津古所在の調査報告 小郡市文化財調査報告書第67集, 小郡市教育委員会, 福岡, 27-31
- 中橋孝博 1990c 藤崎遺跡第13次出土の弥生時代人骨について 小林義彦・田崎真理編 藤崎遺跡V - 第12・13・14次調査 - 福岡市埋蔵文化財報告書第232集, 福岡市教育委員会, 福岡, pp.73-82
- 中橋孝博 1991a 福岡市有田遺跡第126次調査出土の弥生時代人骨 山崎龍雄編 有田・小田部 - 福岡市早良区有田・小田部における遺跡群の発掘調査報告第12集 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集, 福岡市教育委員会, 福岡, pp.87-96
- 中橋孝博 1991b 福岡市上月隈遺跡出土人骨(弥生・近世) 小林義彦編 上月隈遺跡 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第257集, 福岡市教育委員会, 福岡, pp.45-60
- 中橋孝博 1992c V. 付論 福岡市城南区, カルメル修道院内遺跡第三次調査出土弥生人骨 カルメル修道院内遺跡II - カルメル修道院名地遺跡第3次調査の報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第299集, 福岡市教育委員会, 福岡, pp.16-23
- 中橋孝博 1993a 墓の数で知る人口爆発 原日本人 - 弥生人と縄文人のナゾ - 朝日ワンテーパーマガジン⑭ 朝日新聞社, 東京, pp.30-46
- 中橋孝博 1993b 福岡市席田青木遺跡出土の弥生, 近世人骨 下村智編 席田青木遺跡1 - 空港前区画整理に伴う埋蔵文化財の調査 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集, 福岡市教育委員会, 福岡, pp.129-146
- 中橋孝博 1993c 福岡県前原市高上石町遺跡出土の弥生時代人骨について 林覚編 高上石町遺跡 - 福岡県前原市大字高上石町所在遺跡の調査 - 前原市文化財調査報告書第44集, 前原市教育委員会, 前原, pp.37-44
- 中橋孝博 1993d 福岡県筑紫野市, 隈・西小田地区遺跡群出土の弥生時代人骨 筑紫野市教育委員会編隈西小田地区遺跡群 - 隈・西小田地区区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 - 筑紫野市埋蔵文化財調査報告書第38集, 筑紫野市教育委員会, 筑紫野, pp.1-47.
- Nakahashi, T 1993e Temporal Craniometric Change from the Jomon to the Modern Period on Western Japan. American journal of physical Anthropology, 90: 409-425
- 中橋孝博 1994 福岡県甘木市, 栗山遺跡出土の弥生時代人骨 松尾宏編, 栗山遺跡II - 福岡県甘木市大字平塚字栗山所在遺跡の調査 甘木市文化財調査報告書第28集, 甘木市教育委員会, 福岡, pp.73-76
- 中橋孝博 1995a 福岡県大刀洗町甲条神社遺跡出土の弥生人骨 赤川正秀など編 甲条神社遺跡 - 福岡県三井郡大刀洗町大字甲条神社所在遺跡の調査 - 大刀洗町文化財調査報告書第7集, 大刀洗町教育委員会, 福岡, pp.79-88
- 中橋孝博 1995b 大庭・久保遺跡出土の弥生人骨 佐々木隆彦・井上裕弘編 朝倉郡朝倉町大字大庭所在の大庭・久保遺跡の調査 - 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告36集 - 福岡県教育委員会, 福岡, pp.144-149
- 中橋孝博 1997 塚崎東畑遺跡出土の弥生人骨 佐々木隆彦編 塚崎東畑遺跡 - 県道・宮本~大川線関係埋蔵文化財調査報告書 - 福岡県文化財調査報告書第127集, 福岡県教育委員会, 福岡, pp.94-98
- 中橋孝博 2001a 筑紫野市の弥生人骨 筑紫野市史編纂委員会編 筑紫野市史 資料編(上) 考古資料筑紫野市, pp.571-576.
- 中橋孝博 2001b 第5章 大友遺跡第5次発掘調査出土人骨 宮本一夫編 佐賀県大友遺跡 - 弥生墓地の発掘調査 - 平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 A(1), 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室, pp.60-67
- 中橋孝博 2004 福岡市藤崎遺跡32次調査出土人骨 藤崎遺跡15 - 藤崎遺跡32次調査報告 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集, 福岡市教育委員会, pp.55-60
- 中橋孝博 2005 日本人の起源 講談社
- 中橋孝博・古賀英也 1994 VI. 福岡県小郡市・横隈上内畑中内畑遺跡出土の弥生時代人骨 速水信也編 横隈上内畑遺跡 - 福岡県小郡市横隈所在遺跡の調査報告 小郡市文化財調査報告書第89集, 小郡市教育委員会, 福岡, pp.57-68
- Nakahashi, T. and Li, M., (eds) 2002 Ancient people in the Jinanngan rehion, China. Kyushu University press.
- 中橋孝博・永井昌文 1987a 宇木汲田遺跡出土の弥生時代人骨 九州大学文学部九州文化史研究所紀要第32号, 15-57
- 中橋孝博・永井昌文 1987b 福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨 新町遺跡 - 福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査 - 志摩町文化財調査報告書第7集 pp.87-96
- 中橋孝博・永井昌文 1989a 3. 弥生人 1. 形質 永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原眞編, 弥生文化の研究 1. 弥生人とその環境 雄山閣, pp.23-51
- 中橋孝博・永井昌文 1989b 3. 弥生人 4. 寿命 永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原眞編, 弥生文化の研究 1. 弥生人とその環境 雄山閣, pp.76-95

- 中橋孝博・岡崎健治 2006 福岡県那珂川町安德台遺跡群出土の弥生時代人骨 茂和敏編安德台遺跡群－福岡県筑紫郡那珂川町大字安德所在遺跡群の調査－那珂川町文化座調査報告書第67集 那珂川町教育委員会118-128
- 中橋孝博・飯塚勝 1998 北部九州の縄文～弥生移行期の関する人類学的考察. 人類学雑誌, 106: 31-53.
- 中橋孝博・飯塚勝 2008 北部九州の縄文～弥生移行期に関する人類学的考察 (2) Anthropological Science (Japanese series) 116 (2) 131-143
- 岡崎敬 1968 日本における初期稲作資料 朝鮮学報49 pp. 67-87
- 岡崎健治・重松辰治 2003 福岡県小郡市津古牟田遺跡4出土の弥生人骨 杉本岳史編 津古牟田遺跡4 福岡県小郡市津古所在遺跡の調査 小郡市文化財調査報告書第184集 56-70
- 岡崎健治 2021 菌冠サイズからみた渡来系弥生人の成り立ち 岩永省三先生退職記念事業会編 持続する志－岩永省三先生退職記念論文集－ pp.119-130
- Okazaki K., Takamuku H., Kawakubo K., Hudson M., and Chen J. 2021 Cranial morphometric analysis of early wet-rice farmers in the Yangtze River Delta of China. Anthropological Society of Nippon. 129 (2): 203-222.
- 尾本恵市 1978 日本人の遺伝的多型. 池田次郎(編): 人類学講座6. 日本人II. 雄山閣, 東京, pp.217-263.
- 小沢佳憲 2000 弥生集落の動態と画期－福岡県春日丘陵域を対象として－ 古文化談叢44 1-37
- 小澤佳憲 2009 北部九州の弥生時代集落と社会 国立歴史民俗博物館研究紀要149集, 165-195
- 下條信行 1986 日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開－宇木汲田貝塚1984年度調査出土石器の報告を兼ねて－ 九州文化史研究所紀要31 103-140
- 下條信行 2014a 生産具(磨製石器)からみた初期稲作の担い手 古代学協会編 列島初期稲作の担い手は誰か すいれん舎, 175-228
- 下條信行 2014b 西日本における初期稲作と担い手 古代学協会編 列島初期稲作の担い手は誰か すいれん舎, 229-278
- 下條信行・田中良之 2014 対談 列島初期の稲作の担い手は誰か 古代学協会編 列島初期稲作の担い手は誰か すいれん舎, 279-324
- 田中良之 1991 いわゆる渡来説の再検討 日本における初期弥生文化の成立 横山浩一先生退官記念論文集 428-505
- 田中良之 2002 弥生人 佐原真編 古代を考える 稲・金属・戦争－弥生－, 吉川弘文館, 東京, pp.47-76
- 田中良之 2014 いわゆる渡来説の成立過程と渡来の実像 古代学協会編 列島初期稲作の担い手は誰か すいれん舎, 東京, pp.3-48
- 田中良之・小澤佳憲 2001 渡来人をめぐる諸問題 田中良之編 弥生時代における九州・韓半島交流史の研究 九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座, pp.3-27
- 田中良之・平美典・坂元雄紀・重松辰治・石川健 2001 西新町遺跡第10次調査出土人骨について 福岡市教育委員会編 西新町遺跡7－西新町遺跡第10次調査報告書－福岡市埋蔵文化財調査報告書第683集, 福岡市教育委員会, 福岡, pp.57-69
- 高椋浩史 2016 西日本地域の縄文時代から弥生時代にいたる身体・四肢プロポーシヨンの時代変化 田中良之先生追悼論文集編集委員会編 考古学は科学か－田中良之先生追悼論文集－, 中国書店, 福岡, pp.267-285
- 武末純一 2011 九州北部地域 甲元真之・寺沢薫編 講座 日本の考古学弥生時代(上) 青木書店, 東京, pp.85-145
- Temple D.H., Auerbach, B.M., nakatsukasa, M., Sciulli, P.W., and Larsen, C.S., 2008 Variation in limb proportions between Jomon foragers and Yayoi agriculturalists from prehistoric Japan. American Journal of physical Anthropology 137: 164-174.
- 牛島陽一 1954 佐賀県東春振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究 人類学的研究第1巻 第3～4号, pp.273-303
- 分部哲郎 1985 V. 人骨. 2. 福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代小児骨 小郡市教育委員会編, 横隈狐塚遺跡II－福岡県小郡市横隈所在遺跡の調査報告－下巻, 小郡市文化財調査報告書第27集, 小郡市教育委員会, 福岡, pp.47-57
- 山崎頼人・杉本岳史・井上愛子 2005 筑後北部三国丘陵における弥生文化の受容と展開－三国丘陵南東部遺跡群をケーススタディとして－ 古文化談叢 第54集, pp.1-34
- 山崎頼人 2010 環濠と集団－筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生時代前期環濠の諸問題－ 古文化談叢 第54集, pp.1-38
- 米元史織・高椋浩史・舟橋京子・田中良之 2010 横隈狐塚第7次調査出土弥生人骨の形質的特徴について 小郡市教育委員会編 横隈狐塚遺跡7－小郡市文化財調査報告書250集－ 小郡市教育委員会, 福岡, pp.236-242

Received Nov. 25, 2021; accepted Dec. 26, 2021

People of the Yayoi Period in Northern Kyushu: Regional Characteristics of Cranial Traits

Shiori YONEMOTO

The Kyushu University Museum, Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581, Japan

In this study, I examined the regional characteristics of cranial traits in human remains from Northern Kyushu in Yayoi period, which are said to have high facial features that differ greatly from those of human remains in Jomon period but have not been systematically examined for their regional characteristics since 1989. As a result, it was confirmed that there existed people who have similarities in terms of high facial features in the Northern Kyushu region, and even in the Yamaguchi region, when compared with the Jomon period human remains of Tsukumo and Yoshigo and the Yayoi period human remains of Northwestern Kyushu. However, some differences were observed within the group, with the Sawara plain, Kasuga, Fukuoka plain, and Mikuni hills showing a higher face, and the peripheral areas of Onga River basin, Asakura, East Saga, and Yamaguchi showing a relatively lower face height. This result was in agreement with Doi and Tanaka (1987) and Nakahashi and Nagai (1989a). On the other hand, it may be necessary to re-evaluate the facial features of the significant height of the Mikuni Hills and the facial features of the human remains of the Shinmachi Site No. 9. These results suggest that although the presence of a small number of immigrants is important, the so-called Yayoi period cranial traits are established in the Northern Kyushu region, and that the diversity of traits within the region is due to the diverse expression of traits resulting from the progression of admixture.

Key words: Yayoi Period, Northern Kyushu region, Cranial traits, Regional characteristics, Human skeletal remains

